I-12

市におけるヴァナキュラー概念の再考
1960~1970 年代の建築・都市論に見られる近代化への抵抗
Reconsidering the Concept of Urban Vernacular
Resistance to Modernization in Architecture and Urbanism in the 1960s and 1970s

○小滝　愛花[1]，田所　辰之助[2]
*Manaka Otaki[1], Shinnosuke Tadokoro[2]

This study aims to resist to today's urban that is homogenized by reinterpreting the general idea about "vernacular", which means Cultures that are closely related to the lives of a group of people, and cultures that arose in a particular time, period, situation, or land, as well as the traditions that underlie such cultures.

１．研究背景

近代以降の都市は合理的かつ普遍的な構造を持ち、非常に便利で明快ある。また、経済性に形態根拠を求めすぎた建築はどこでも建てられるような見た目をしていて、都市を均質化させていく。

このような都市や建築のあり方は私たちから自身の置かれる環境について考える時間や自分たちの手で都市を豊かにしようとする活力を奪ってしまったのではないだろうか。そして、その責任は都市や建築を造ってきた建築家にあると考える。そこで、現代の都市や建築の造られ方の対局にある「ヴァナキュラー」概念に着目し、都市や建築の在り方を再考する。

２．研究目的

1960 年代から1980 年代にかけて、多くの建築家たちが近代建築に抵抗する手がかりとしてセルフビルドや「ヴァナキュラー」な建築、農村や漁村の民家など無名の人々が自発的に造り上げた建築に着目した調査や論文を発表した。それらの雑誌記事や本、作品等を通じて当時の建築家たちが「ヴァナキュラー」概念をどのように捉え、近代化の時代においてなぜ取り上げたのかを時代背景と合わせて考察するとともに、「ヴァナキュラー」概念を再考し現代の都市や建築の中でどのような役割を果たすことができるのか考えることを目的とする。また、比較や「ヴァナキュラー」概念の理解を深めるために、建築以外の分野においてどのように表現されてきたかを探る。

３．研究方法

1960年代から1970 年代前半に出版・執筆された建築の雑誌や本を読み、「当時の建築家たちが建築や都市をどのように捉えていたのか」「なぜヴァナキュラーという概念に着目したのか」「ヴァナキュラー概念をどのように捉えていたのか」の3 点を考察する。

建築以外の分野でヴァナキュラーがどのように表現されてきたのか、民俗学等の学問にも触れる。

４．1960~1970 年代の様相

本研究において取り上げる 1960～1970 年代は、安保闘争や学生運動、婦人会の立ち上げなどが起こり、政府や大学の幹部といった巨大な権力組織の選択に従うのではなく、自らがどうしたいのかどうあるべきなのか選択して動く時代であった。現代でもデモ隊や署名活動を見かけることもあるが 1960 年代のものとは規模が全く違うように感じる。建築において、自ら環境を創出するような動きが 1960 年代から徐々に起こり始めたが、これは新しい社会のあり方を模索する動きに伴うものであったと考える。

また、同時代には東京オリンピックの開催に伴って都市の構造が大きく変貌した。首都高速道路や新幹線が開通し、移動時間が大幅に短縮され、私たちの距離の感覚が変化した。物の移動だけではなく、高度経済成長による国の発展は情報のスピードも加速させていき、現代の社会の礎を作った時代でもある。

1960~1970 年代に学ぶことは、現代の社会構造、都市構造の源流を辿ることにつながると考えている。

５．ヴァナキュラーの再定義

「ヴァナキュラー」は元来民俗学において用いられる用語であり、支配的権力に馴染まないものや啓蒙主義的な合理性では必ずしも割り切れないようなものなど普通・主流・中心的なものと対極にあるものと定義される。例えば、古典音楽に対する民謡

１：日本大学理工・院(前)・建築、２：日本大学理工・教員・建築

や、文学作品に対する民話、科学的根拠は持たないが昔から効果が信じられているおまじないなどが該当する。「ヴァナキュラー」なものは口頭により受け継がれ、その時代ごとに解釈が変わったり再構築されたりしながら現代にも残り続けている。建築においてはバーナード・ルドフスキーによる「建築家なしの建築展」で取り上げられたような、無名の市民たちによる匿名の建築を指す。これらは建築家の手がけた建築とは異なり、気候の条件や産業、材料など純粋にその地での生活と向き合った産物である。以上から私は「ヴァナキュラー」を自発的な創造行為が集積した結果として立ち現れるものだと考えている。これは、自身を取り巻く「敵」となる環境への抵抗だと考えることもできる。

以降、ヴァナキュラーを「世の中にある大きな流れに対し何らかの創作行為を行うことによる抵抗」と定義する。

６．建築・都市論における「ヴァナキュラー」

建築において初めて「ヴァナキュラー」という単語が使われたのは、バーナード・ルドフスキーによる「建築家なしの建築」と同様の表題を掲げた展示である。ルドフスキーは建築史のメインストリームから外れた「風土的」、「土着的」、「無名の」、「自然発生的な」、「田園的な」建築を集め、発展を続ける文明により疲弊していく都市や建築に警鐘を鳴らした。

日本では、伊藤ていじや宮脇檀らによる「デザイン・サーヴェイ」が興隆し、漁村や離島の建築と町の構造を実施調査したものを「建築文化」にて連載した。漁村や離島のような、便利とは言い難い環境下において、環境との付き合い方、生業や歴史に基づいた建築や都市の構成がスケッチや図面に立ち現れていた。こういった都市から距離のある空間への着目は、当時の近代化が加速する世の中に対する嫌悪や原点回帰的な意味合いを持っていたと考える。同時期に立ち上がった赤瀬川原平らによる「路上観察学会」も非常にユニークな取り組みである。路上観察学会は、今和次郎の「考現学」をルーツに持ち、歴史的な流れを読み取るよりもむしろ現在起こっていることに眼差しを向けるものであった。都市の中で、路上に残された痕跡を探るこの取り組みに、「ヴァナキュラー」という言葉に含まれるどこか古い・伝統的なものといったイメージを払拭する手がかりがあると考えている。似たような取り組みに原広司の集落観察もあげられる。ここでは古くから残る集落の構造が住民の思想に基づくものであり、それらは風土に相関性があることが読み取れた。

７．他分野におけるヴァナキュラー

前述の通り、ヴァナキュラーは民俗学の用語である。

身近な例で言えば、民謡や民話が挙げられる。黒人にルーツを持つ「ブルース」は白人の元で奴隷として働いていた黒人たちが自身の労働環境の劣悪さを乗り越えるために歌ったことがきっかけで誕生した。

また、漁港では一般に魚を入れるトロ箱を積み上げて干すが、佐賀県の唐津漁港では狭い路地空間に干すために特有の積み上げ方をする。これは、使える空間が少ないという変えられない環境の中で編み出された方法である。

８．まとめ

以上から、ヴァナキュラーとは世の中の大きな流れに対して抵抗する創作行為であると考える。現代の都市や建築の均質で合理性を重視したあり方は、私たちの入り込む余地を奪い、都市と建築、人の距離を遠ざけてしまったのではないか。私たちはこのような状況に対して危機を持ち、打開する術を模索する必要があるように思う。私はヴァナキュラーを再考することにその手段となる可能性を感じる。

９．参考文献

[1] バーナード・ルドフスキー：「建築家なしの建築」，鹿島出版会，発行年 1984.

[2] 明治大学神代研究室、法政大学宮脇ゼミナール：「復刻　デザイン・サーヴェイ＿『建築文化』再録」，彰国社，2012.

[3] 伊藤杏里：「デザイン・サーヴェイ図集」，オーム社，2019.

[4]ウェルズ恵子：「ヴァナキュラー文化と現代社会」，思文閣出版，2018.

[5] 島村恭則：「みんなの民俗学」，平凡社，2020.

[6] 加藤幸治：「民俗学　ヴァナキュラー編」，武蔵野美術大学出版局，2021.

[7] 広島現代美術館：「路上と観察をめぐる表現史考現学の「現在」，フィルムアート社，2013.